

もうすぐお盆です。お盆は、ご先祖様が子どもや孫の住む家に帰ってくる季節です。

ところで皆さんは、自分が何か失敗をした時に、普段自分と気持ちの合わない人から、頭ごなしに^{あやま}過ちを指摘されたらどうでしょうか。「何だ！偉そうなことを言っ
て！」と、自分の過ちを^{たな}棚に上げて、相手の注意に腹を立ててしまうでしょう。

しかし、^{そんけい}尊敬している人から注意を受けたら、「ああ、あの人に注意されたら仕方
ないな。済みませんでした」と、^{あやま}謝ることができるのではないのでしょうか。

また、相手と自分の意見が合わない時はどうでしょうか。お互い全く歩み寄ることが
できずに、しまいにはどちらもイライラが^{つの}募り、話し合いは物別れ……。

でも、一人になって静かに考えて見ると、場合によっては、「ああ、相手の言うこと
も^{いちり}一理あるな。さっきはイライラしていて、気が付かなかった」または、「自分の言っ
た事を理解してもらいたくても、あんな言い方をしたら、相手も怒るよなあ」と、反
省することもあるでしょう。しかし、再びその相手と顔を合わせてみると、また同じ
事でぶつかってしまうのです。心の中では相手のことを受け入れたいのに、今までの
^{けい}経緯を考えると、なかなか^{たいど}素直に態度が切り替えられません。これは、ちょっとした
関係の人よりも親しい関係の人、他人であるよりも親・兄弟などに対して、その傾向
が強くなります。

このように私たちは、自分の過ちを差し置いて、相手によって話を聞いたり、聞か
なかったり。あるいは、心の中では理解しているのに、態度として表すことができな
い息苦しさを持つことがあります。

それは、誰もが心に持っている「我」というものが私たちを^{まど}惑わせるのです。仏教
でいう「我」とは、常に自分中心、自分の利益を最優先にさせる心の働きの事です。

この「我」は、^が生きている人を相手にしていると思うと、ムラムラと^わ沸き起こって
きます。けれども不思議なことに、亡くなった人に対してお参りをしている時や、「い
まこの人と生きて会うのはこれが最後だ！」ということを実悟した時、心の中の「我」
は^{しず}鎮まったままで、^{おだ}穏やかに過ごす事ができます。

お盆は、亡き人が私たちのすぐ近くに帰ってくる季節です。

この機会に、亡き人が^{せいぜん}生前に話していたことを、もう一度、心静かに思い出して
みて下さい。亡くなってしまったからこそ聞こえてくる、あの人の声…。亡くなって

しまったからこそ気付く、あの人の思いやり…。

お盆は、この世に生きる私たちが「我」を離れ、自分自身の素直さに帰っていく季節です。

— 終 —